

広島・郡山城跡（大通院谷地区）

「おりやまじょうあと

だいとういん

かみやい

1 所在地 広島県高田郡吉田町上迫

2 調査期間 一九九六年（平8）1月～一九九九年六月

3 発掘機関 (財)吉田町地域振興事業団

4 調査担当者 新川 隆ほか

5 遺跡の種類 集落跡・官衙関連施設跡・城館跡

6 遺跡の年代 弥生時代～近世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

遺跡は、吉田町の中心部、江の川と多治比川の合流する市街地の北東にあたる郡山城の南西麓に位置する。市街地からの比高は二〇～五〇m程で、南西方向に開けた谷地形となっている。



(八重・可部)

居、弥生時代前期から埋没が始まる旧河道などで、中世には郡山城内堀のほか毛利氏家臣の武家屋敷、古代では旧高宮郡の郡衙関連施設（本誌第一六号）が存在していたと考えられている。これらの遺構に伴う様々な遺物も出土している。中世では大量の輸入陶磁器・国産陶磁器・土師質土器・金属製品・木製品など、古代では、円面硯・緑釉陶器・墨書き土器「乙足」・刻書き土器「厨」・漆土器・石帯のほか、大量の須恵器・土師器などが出土している。

今回紹介する木簡は、調査区の東側で検出した石組みの井戸（SE1101）の底から銅製の鉄漿付皿と一緒に出土した。この井戸は屋敷の敷地内にあつたと考えられ、一六世紀後半の遺構である。規模は、現状で内径約1m深さ1～8mを測る。構造は、上部が円形、下部は方形に石組みされているが、陣木は組まれていない。他の遺物としては、中層から出土した息抜きと思われる竹筒の一部や大型の木製杓子などがある。

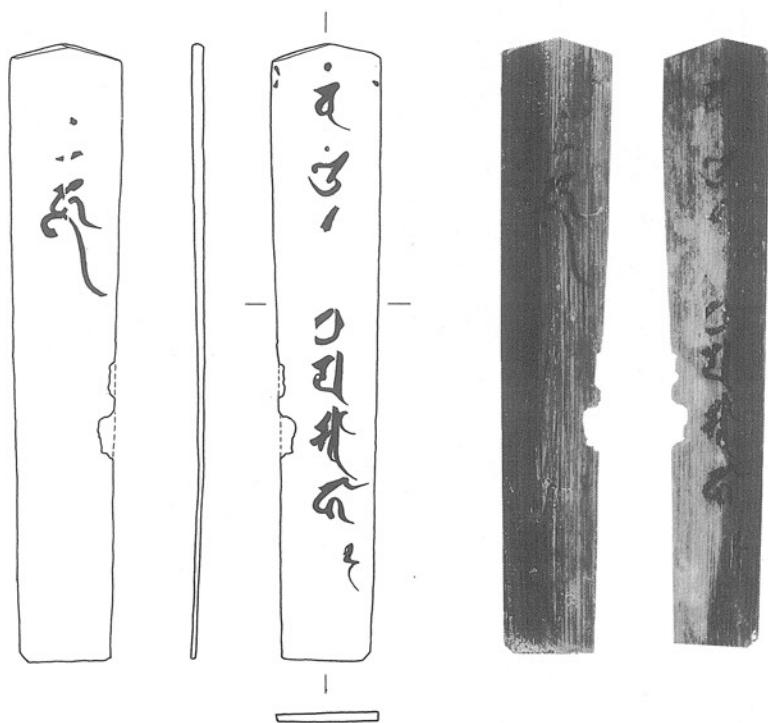
8 木簡の釈文・内容

(1) 「アカ □□□アザル」

・「・」

301×54×6 011

長方形の材の上端を主頭に加工し、表裏に梵字を墨書きした御札か呪符と思われる木簡である。表面は中ほどの三文字が判読できないが下の文字が「アカ」と推測でき、この文字数、配列で表される真言は水



天を表す「**パンオンバラダヤソワカ終止符**」しか該当する尊格がない。意訳をすると「水天に帰命し奉る成就あれ」となる。裏面は「ウン」であるが、これを種字とする尊格は非常に多いため特定することが難しく、一憤怒尊とするに留まる。ただ、仰月点があり、流れパン字に似るスタイルは水との関連を示唆するという。表面の梵字が水天の真言とすれば、表裏とも水との関連があり、井戸の底部からの出土ということからみても、井戸に関する祭祀に使用されたものとすることができよう。出土状況から、おそらく井戸の廃棄時に鉄漿付皿とともに埋められたものと思われる。

なお、本木簡の釈読にあたっては、木下密運・渡辺單空両氏よりご教示を頂いた。

(新川 隆)